

プリンス（半促成）

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
作型 I	▲ ~ ◎ — ※ ————											◇
II	▲ ~ ◎ — ※ ————											○
主な作業	接鉢定 ぎ上植 木げ		交 配		収 穫					圃 場 準 備		は 種

メロン ウリ科 原産地：中央アジア、アフリカ、
中近東

作物名：プリンスメロン・キンショウメロン

学 名：Cucumis melo L.

作 型：半促成栽培

根は浅根性で酸素要求度が高い
排水・保水性が良好で気相の多い土壌

4 施設装備

- (1) 単棟型ハウス＋多重トンネル
- (2) 灌水チューブ

5 経営目標

- (1) 収量 2. 5 t / 1 0 a
- (2) 投下労働時間 4 8 0 時間 / 1 0 a
- (3) 所得率 5 5 %
- (4) 経営規模 4 0 a
(家族労力 2 人の場合)

技 術 体 系

1 作型の特徴

プリンスの半促成栽培は、低温期の無加温栽培であるから、被覆による最低気温の確保、適正施肥、土壌水分管理が高品質生産につながる。播種にあたっては別項の地帯区分、施設と被覆の標準タイプを参考に決定する。

2 適応地域

全域

3 栽培条件

(1) 温度

発芽適温 2 8 ~ 3 0 ℃

生育適温 2 5 ~ 2 8 ℃

地 温 1 6 ℃ 以上

(2) 光

光飽和点 4 万ルクス

弱光では生育・収量・品質が低下する

(3) 土壌条件

p H 6 ~ 6 . 8

土壌適応性の幅は広い

栽 培 技 術

1 品種と特性

露地メロンは、多くの品種がキャンタロープとマクワとの交雑によって育成されたもので、果実は小型でネットの発生するものは少ない。病害虫にも強く、多湿や低温にもよく耐え、メロン類の中では最も栽培が容易である。露地メロンとはいっても、他の果菜類に比べれば雨に弱く、高温にはメロン類の中では最も弱く、夏になると急激に品質が低下する。

「プリンスメロン」

南欧のシャランテ系×ニューメロンで、早生の糖度の高い品種。低温時の草勢は強く、葉は濃緑で欠刻が大きい。葉は中葉で、茎は細い。果実は 4 0 0

～800 gの中玉で果皮色は灰白、果肉はサーモンピンクである。糖度はブリックスで14～16%と高く、芳香性がある。成熟日数は35～45日程度である。

【台木】

「No.8」

白菊座系の日本種カボチャである。新土佐系に比べ、草勢が弱く、草勢調節が容易であり、特に果皮の色上がりが良く、品質が向上する。欠点として生育後期の草勢低下をおこしやすく、また低温や乾燥状態に遭遇すると葉が巻き上がることもある。

「みちづれ」

メロン共台である。低温伸長性、草勢は自根に比べ、やや強い程度である。したがって草勢調節はカボチャ台に比べ容易になり、品質がよい。

2 育苗

(1) 播種量

播種量は仕立て方により異なるが、プリンスメロンの場合は3本仕立てを標準にする。したがって、本圃10a当たりの播種量は700粒になる。

(2) 播種期

播種期は、土づくり、定植準備、施設と被覆方法等によって決める（十分に温度、地温を確保する）。

I型 12月15日

I型 12月20日

III型 12月25日以降

(3) 接ぎ木

接ぎ木は、つる割病の回避と低温伸長性の附与を目的に行う。

プリンスメロンは、カボチャとの親和性は高く、不親和を起こすことは少ないが、自根に比べるとカボチャ台は吸肥性が大きく異なるため、栽培にあたっては特性を十分把握して行う。

(4) 接ぎ木法

接ぎ木法には割り接ぎ、挿し接ぎ、呼び接ぎ等の方法があるが、一般的には接ぎ木後の管理作業

が容易な呼び接ぎを行う。

(5) 播種

ハウス10a当たり、野菜専用育苗箱4個を準備する。また、接ぎ木する場合は、台木用としてさらに6箱が必要になる。

播種床は排水の良い無病の床土を用いる。

発芽適温は28～30℃である。播種床の温度、水分が適当であれば、催芽まきの必要はない。

発芽床の電熱線は、3.3㎡当たり250～350Wが必要になる。

夜温は床温25℃が確保できるようサーモスタットを設定する。

昼間は30～33℃とし、3～4日で発芽するから、その後は次第に温度を下げ、移植（接ぎ木）前は床温20℃、昼間は28～30℃にする。

なお、本圃10a当たりの育苗ハウスは、15㎡が必要である。

(6) 移植

直径12cmのポリ鉢に移植する（床土量1ℓ）。温度管理は、活着するまで昼間30～33℃、夜温22℃を目標にする。

活着後は昼間28～30℃、夜温20℃とし、さらに、夜温の温度は5日間隔で2℃単位で下げて行き、定植の2～3日前には12℃程度にし、苗を硬化させる。

(7) 摘心

本葉の展開が3枚時に5節残して芯を摘む。

2 本圃準備

(1) 定植準備

ハウスの準備、施肥、畦立ては早めに行う。定植準備で特に重要なことは、マルチ張りによる地温の確保である。10月中に堆肥の投入をおこない、11月中にビニル、マルチの被覆を行い、播種時期前にはトンネルの準備を行い午前10時頃の地表10cmの地温が16℃以上になるようにする。

(2) 施肥

ア 施肥にあたっての考え方

窒素は生育中期までに主に吸収され、収穫前

には切れる状態が望ましい。特に、後期の窒素過多は、糖の蓄積不良、果皮の色抜け不良、裂果、発酵果の発生につながるので注意する。

イ 標準施肥量

10 a 当たり成分量は窒素 12 kg、リン酸 12 kg、カリ 15 kg とし、栽培期間、土質によって加減する。

基肥と追肥の割合は 7 : 3 にし、追肥は 1 ~ 2 回に分施する。

施肥量 (kg / 10 a)			
	N	P ₂ O ₅	K ₂ O
元 肥	8	8	10
追 肥	4	4	5
合 計	12	12	15

備考
堆肥 2 t
苦土石灰

3 本圃管理

(1) 定植

育苗日数からみた定植苗の目安は、自根苗 32 ~ 35 日、接ぎ木苗は 35 ~ 38 日とする。

必ず地温 16℃ が確保されてから定植を行う。

定植にあたっては晴天日を選び、植え傷みのないように植える。

植えつけは根鉢部の八部目位のところまで土寄せする。

定植後は、株元を中心に、乾燥状態をみて 2 ~ 3 回灌水を行う。

(2) 栽植様式

標準的な栽植密度は畦幅 250 cm の場合、株間 70 cm とし、270 cm のときは 65 cm とする。10 a 当りの栽植本数は 570 株になる。

(3) 定植後の管理

定植直後は温度、湿度ともに高目に管理し活着を促進する。定植から 3 ~ 4 日は、トンネル内気温が 33 ~ 34℃ を超える場合にはすかしを行う。この管理を長期間行くと軟弱徒長になるから、朝方、葉へ溢液現象がみられたら、昼間の温度は 30 ~ 32℃ としトンネルの換気を開始する。

夜温の最低温度は 12℃ を目標にし、10℃ 以下に下げないようにする。トンネルは 23℃ に下

がったら閉め、被覆によって放熱を最小限に抑え、気温を確保する。

(4) 整枝と着果節位

着果節位以下の側枝は早めに取り除き、8 ~ 10 節を結果枝として残し、2 葉摘心とする。ここを 1 番果の着果節位とし、2 番果は 15 日後程度に開花する 17 ~ 19 節を着果節位とする。

なお、2 番果の着果は草勢、1 番果の着果、肥大の状態に左右され、着果しない場合がある。この時は、1 番果着果後 25 ~ 30 日程度経過すると、ひ孫づるが発生してくるから、ひ孫づるに着果させる (3 番果とも言う)。

(5) 着果数と摘果

1 番果は、2 月交配のものは株当たり 5 果、3 月交配のものは株当たり 6 果とする。

摘果は着果から 4 ~ 5 日目に行うが、縦長のものを残す。

(6) 温度管理

低温期の無加温栽培であるから、温度確保は被覆による保温であり、最低気温の確保に務めねばならない。目標温度は生育ステージによって変わる。

最低気温は、交配期までは、10℃ を確保すれば正常に発育するが、交配期から果実肥大期は 12℃ 以上が必要である。

昼間は、同化作用の生理からみた、日中の光合成時間帯は 28 ~ 30℃ が適温とされているが、無加温栽培では、夜間への熱蓄積を考慮し、これより高く管理したほうがよい。

定植直後は 32 ~ 34℃ で管理し、活着したら 28 ~ 30℃、交配から果実肥大期は 30 ~ 32℃、成熟期は 28 ~ 30℃ とする。

地温は 15℃ 以下になると、定植後の活着が悪くなり、この状態が長く続くと細根は枯死する。

(7) 灌水管理

定植後は適度のしめりを与え、生育を促進する必要がある。定植から交配までの灌水の目安は pF 2.0 とし交配期は pF 2.3、果実肥大期は pF 2.0 を維持し、成熟期は pF 2.4 とする。後期まで土壤水分が多いと緑条がとれず、果皮の

色上がりが悪くなる。p F 2. 6以上の乾燥が続くと果実の肥大が悪く、草勢が低下し、果皮に黄斑が出る。

(8) 収穫

熟期に入ると果梗部に離層を形成し、軽いヒビができる。この直前に収穫する。果皮は光沢が出、プリンスメロン独特の芳香がする。

着果から収穫までの日数は約38日である。また、4月上旬～中旬まで収穫するものについては低温管理により、着果から収穫までの日数が長くなると、発酵果の発生の恐れがある。